
黒の組織との最終決戦！！

martini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の組織との最終決戦！！

【Nコード】

N1423F

【作者名】

martini

【あらすじ】

二人の男が、電話で会話をしている。一人は、何かのボス。もう一人は、たぶん部下だろう。その二人の電話から、ことは始まっていく。運命の歯車が、今動き出した！！

プロローグ

ある夜。一人の男が、暗闇の中で、電話をしていた。

??「・・・言うことです。ボス。」

男は、何かのボスらしい。

敬語を使っているのは、部下だろう。

??「相手は、われわれのアジトに感づきました。」

??「そうか・・・お前の情報網はすごいからな・・・分かった。
引き続き、様子を探れ。」

??「ハッ!」

男は、電話を切った。

その顔には、不敵な笑みが浮かんでいる。

??「さあ、ラストバトルのスタートだ・・・！」

男の声が、響いた。

どこまでも遠く、響きそうだった・・・

プロローグ（後書き）

意味分らないと思いますが、いつかわかります。

気長に待ってくださいね。

FILE 2 アジト発見！

小林「はい、この問題、分かる人〜！」

ここは、帝丹小学校の教室、1年B組。コナン達の教室だ。

授業中、マナーモードにしていた、コナンの携帯がなった。

コナン「ん？（誰だ、こんな時に・・・）」

コナンは、黙って携帯を見る。

メールをしてきたのは、ジヨディだった。

メールの内容は、こうだ。

『組織のアジトが見つかったわ。放課後、いつものところにきて。
ジヨディ』

コナン「（組織のアジトが・・・？！フツ、見つかったなら、つぶすまで行くさ。必ず。）」

コナンは、ジヨディからのメールが来てから、上の空だった。

コナンは、放課後になると、皆に先に帰っててくれと伝え、ジョディのところへと向かった。

コナン「ジョディ先生！見つかったって、本当？！」

ジョディ「ええ、本当よ！今確認したから、間違いないわ。」

ジョディも、少し興奮しているようだ。

赤井「とりあえず、作戦を練った。これでいけるか、ボウヤに考えてもらおう。」

コナン「僕に・・・？」

コナンは驚いた。

子供の姿で、子供として見られているはずなのに、そんな自分に、最後の確認を頼むのだから。

コナン「うん。……………」

コナンは、じっと紙を見つめる。

そして、口を開いた。

コナン「いけると思うよ！すごいね、ここまで考えるなんて！」

コナンは、すごいと思った。

赤井やジョディ、ジェームズを尊敬してしまう。

ブー、ブー、ブー、ブー。

携帯の音だ。

コナン「僕みたいだね。ちょっと電話してくる！」

コナンは、タタタツと部屋から出ていった。

ジヨデイ「さて。あとはコナン君の役割ね。」

ジェームズ「我々と同じのほうがいいんじゃないか？」

赤井「同感。俺達のほうがいいだろう。」

ジヨデイ「了解。」

ボタンッ！

ドアが開き、コナンが入ってきた。

電話が終わったらしい。

コナン「で、僕、何をすればいいの？」

赤井「我々の援護をしてほしい。」

コナン「OK。」

コナンは返事をする、時計をした。

コナン「あっ！時間が！」

ジェームズ「夜だな。急いで帰りなさい。」

コナン「はい！」

コナンは、タタタツと部屋から出ていった。

コナンは、誰かと電話をしていた。

コナン「分かったな？ぬかるなよ。」

??「ハッ！」

男の声が、携帯から聞こえてくる。

ピツと電話を切った。

コナン「フツ・・・そろそろか・・・あいつらの血を見れるのは・・・」

コナンは、ジンよりも冷酷かもしれない笑みを浮かべた。

人を何十人と殺してきたような、笑みを・・・

FILE 2 アジト発見！（後書き）

コナンの不可解な行動の意味がわかり次第、何かほかに、書くかも
知れません。

待っててねw

FILE 3 ばれた正体

「コナン」ってことです・・・」

コナンの声が、阿笠邸に、むなしく響く。

コナンが、なぜそんな風になっているのかという・・・

それは、1時間前のことだった・・・

コナンは、毛利探偵事務所に戻る前に、阿笠邸に行った。

哀「工藤君。あなた、ジョディ先生と会ったでしょ？」

コナン「へ??？」

コナンは、おかしい声を出してしまった。

哀「とぼけないで。ちゃんと見てたわよ。組織のアジトが見つかったんですって？私も行くわよ。私が、元凶なんだから。」

コナン「は、灰原・・・」

哀「それに・・・さっき手紙が来たわ。組織から。」

コナン「な、何だと?!!」

コナンは、声を上げる。

哀「手紙には、こう書いてあったの。『江戸川コナン様へ。 お前達の正体は分かっている。灰原哀は、宮野志保。シェリーだ。お前が、工藤新一。もし、ほかの者たちに危害を加えてほしくなければ、A、B、C、Dの内の、どれか一つのビルを選べ。』ってね。答えは、Bらしいわ。FBIにも見せたの。正体を知っても、動じなかったわ。」

コナン「ちょっと待て！オメー、俺の許可なく言ったのかよ？俺の正体を！」

哀「隠し通せることじゃないわ。否が応でも、必ずばれる。それなら、ばらしておいたほうが、いいと思ったの。ごめんねさいね、勝手な真似をして。」

コナン「……！まったく、しょうがねーな！」

哀「ありがとう、工藤君。」

哀が、そう言った時だった。

キィー……

ドアが開く音がした。

そこには、小五郎、蘭、園子、歩美、元太、光彦、服部、和葉がいた。

蘭「し、新一……？」

哀「ら、蘭さん……？」

コナン「え、ええっと、そうじゃなくて、新一お兄ちゃんのことを話してたんだよ。な？灰原。」

哀「え、ええ、そうよ。と、とにかく、お茶、入れるわね。」

皆『待つて！』

異口同音だった。

蘭「隠さないで、言って？」

蘭の言葉で、蘭たちから背を向けていたコナンと哀が、蘭たちのほうを向いた。

コナンは、スッと目を開けた。そして、哀が、思いもなかった言葉と言った。

コナン「それはやめたほうがいいよ。死ぬからね。死ぬ覚悟があるなら、聞きな。だが、死にたくなければ、今すぐ帰れ。これでいいだろう？ 選択肢は、二者一択だ。」

皆、背筋がゾクリと来るのを感じた。

哀「（・・・！組織特有の、あの皮膚を射るような‘冷たい’目・・・！どうして・・・どうして・・・？）」

コナン「・・・」

哀「（どうして工藤君から感じるの?!）」

コナン「フツ。死にたくないだろう？ 説明するときには、敬語を使うよ。」

新一口調から、コナン口調へとチェンジする。

蘭「新一！私がそんなに怖がりだと思ってるの？！私はいつも、事件に巻きこめれてるのよ？！それぐらい、へっちゃらよ！」

コナン「・・・本当に、そう思っただね・・・？」

蘭「ええ！」

コナン「分かった、話そう・・・でも、歩美、元太、光彦はダメだ。親がいるからな。」

歩美「うん・・・行こう、元太君、光彦君。」

元太「おう。」

光彦「はい・・・」

歩美、元太、光彦は、少しうなだれながら、部屋から出ていった。

コナン「じゃあ、話すね・・・」

そして、コナンは話し始めた。

トロピカルランドのこと。

黒の組織のこと。

哀のこと。

などを。

話している間に、一気に形勢逆転。

蘭にはちゃらめっちゃら言われつつ、話していく。

コナン「ってことです・・・」

コナンの声が、阿笠邸にむなしく響く。

コナン「明日、アジトに行く。準備しておいたほうがいいよ。じゃあ、僕は。準備しに行くよ。詳しい事は、灰原から聞いてね?」

コナンは、部屋から出ていった。

コナン「ここならだれもないな・・・」

コナンは無線機を取り出した。

コナン「人数変更、人数変更。FBIのほかに、シェリー、毛利小

五郎、毛利蘭、鈴木園子、服部平次、遠山和葉。この6人が、参戦する。毛利蘭の空手。毛利小五郎の柔道。遠山和葉の合気道。服部平次の剣道には、特に気をつける。」

?? 『ハッ!』

コナン「ぬかるなよ・・・」

?? 『分かっています。』

電話を切り、夜空を見上げた。

コナン「フッ。面白いことになりそうじゃないか・・・」

不敵に笑い、じっと夜空を見る。

空は、とてつもなくきれいな星空だった・・・

FILE 3 ばれた正体（後書き）

まだまだですね。

話が進まない・・・

ばれちゃいましたが、この続きは。大体決まっております。

一人でもいいから、読んでね〜w

FILE 4 潜入

次の日。

FBIと合流したコナン達は、アジトへと忍び込んだ。

下っ端どもが向かってくるものの、その者のほとんどが、蘭の空手で伸びている。

そして、一番奥の部屋へとたどり着いた。

赤井「俺から行く。」

赤井が、勢いよくドアを開けた！

そこには、ジン、ウォッカ、ベルモット、キャンディ、コルン、そして・・・

コナン「父さん・・・」

コナンの父である、工藤優作がいた。

ジン「クツクツク・・・よく来たじゃねえか・・・」

ベルモット「歓迎するわよ・・・シェリー・・・」

哀「!!」

コナン「気にするな。」

哀「え、ええ・・・」

コナンは、ただでさえ自分の父親が、組織の仲間だったというのに、哀を励ました。

そして、赤井は言う。

赤井「あの方、はどこだ？」

ジン「すぐそこにいるじゃねえか。」

皆『?!』

ジンの答えに、皆はキョロキョロしている。

そして、一人の男が、手をあげて名乗り出た・・・

哀「く、工藤君・・・?」

手を挙げたのは、なんと、コナンだった・・・

コナン「フツ。」

コナンは、スタスタと歩いていく。

そして、ジンのところまで行くと、くるっと赤井たちのほうを向いた。

コナン「俺達は、組織の四天王。一人目、工藤優作。コードネーム暗号名、ピイカル。二人目、ベルモット。三人目、ジン。コードネームそして、最後。組織の「あの方」、工藤新一、つまり、俺だ。コードネーム暗号名、スピリタス。」

蘭「そ、そんな・・・」

皆は、信じられない様子だった。

哀「じゃあ・・・工藤君は、私たちを裏切ったの?!」

コナン「裏切ったんじゃないよ。騙してたんだよ、お前たちの情報を手に入れるためにな。だが、FBIには、赤井秀一がいる。そう簡単に騙せるかと思っただぜ。子供の姿なんだからな。だが、ジョディ・スターリングのおかげで、まんまと騙せたぜ。ころっと引っ掛かりやがった。お前たちと話している間、笑いが込み上げてきたよ。部屋を出て、家に戻って大笑い。おもしろおかしくて、腹が痛かったぜ。フツ。ハハハハハッ!!」

コナンは、笑っている。

組織特有の、あの「冷たい」目で。

コナン「あそこに扉があるだろう?あの扉は、その部屋にいる四天王を倒さないと、先には進めない。一人目、パイカルを倒さないと。そして、倒せば次に、ベルモット。次にジン。最後に、俺だ。フツ。健闘を祈るぜ。」

コナンは、フツと消えてしまった。

優作（以下、パイカルと表示）「まずは、こいつらを倒さないとな。」

パイカルがそう言うと、下っ端どもが出てきた。

赤井「チッ！」

蘭「行くわよ！」

下っ端どもと戦っているうちに、ジン、ベルモット、パイカルは、いなくなっていた。

蘭の空手で、どんどん倒れていく。

銃、格闘。

どんどん下っ端どもが倒されていった。

下っ端どもを倒し終わると、キャンティ達との戦いだ。

キャンティ「よくやるねえ・・・格闘娘もいるし。まあ、
から聞いてたけどね。」

ウォッカ「やろうぜ。」

キャンティ「言われなくても！行くよ！」

壮絶な戦いが始まった。

始まって20分ほど経っただろうか？

ウォッカ「ぐっ！」

ウォッカが倒された。

コルン「ウォッカ、倒された・・・」

コルンは静かにそう吐く。

コルン「?!」

コルンのスキをついて、蘭の空手技、回し蹴りがコルンに炸裂した。

キャンティ「コルン！チツ！よくもやってくれたねえ！」

キャンティの持っている銃の銃口が、蘭に向いた。

蘭「!!」

赤井「危ない！」

赤井は、キャンティに向かって銃を撃った。

キャンティ「きゃあ！」

キャンティは、倒れてしまった。

ガガガツと扉が開く。

ジェームズ「パイカルとの戦いだな・・・」

哀「そうね。行きましょう。先に進まない限り、終わらないわ。」

哀の声で、皆は歩き出した。

次の部屋で待ち構えているであろう、工藤優作、いや、パイカルの元へと・・・

FILE 4 潜入（後書き）

黒の組織会話

コナン「こんにちわー！皆さんおなじみの、江戸川コナンです！
今じゃ、敵ですけど。よろしく願いしまーす！」

??「妙に明るいな・・・」

コナン「今言ったのは、皆さまがよく知っている人、ジンです！」

ジン「うるせえ・・・って言うか、誰に喋ってんだよ？」

コナン「もちろん、読者の皆様です！」

ジン「・・・もういい。とりあえず聞く。なんでそんなに明るい？」

コナン「だって、FBIが来たんだぜ？FBIが！もったまもなく
つてさ！久し振りにいい戦いができるー！」

??「最後の部屋まで来ることを祈るのね。」

コナン「今言ったのは、ベルモットです！」

ジン「・・・つまり、俺に倒されると・・・？」

コナン「ピンポーン！御名答ー！」

ジン「・・・嬉しくねえ・・・」

コナン「何か言ったか？ああ？」

ジン「・・・いや、何も・・・」

コナン「最初っからそう言っただけ。」

ベルモット「ボス化したわね。」

コナン「何かいいました？ベルモットさん？」

ベルモット「気のせいよ。」

コナン「気のせいだといんだけどなあ？って言うか、てめえら。後書きでは敬語じゃねえんだなあ？」

ジン・ベルモット「すみません・・・」

コナン「まあ、時間がねえから、これぐらいにしといてやるよ。んじゃあな。」

ジン「結局、これは何だ・・・？」

FILE 5 裏切り

次の部屋へと到達した、赤井たち。

そこには、さっき聞いた通り、パイカルがいた。

パイカル「やはり、来ると思っていたよ。あんな下っ端たちに倒されるようじゃ、あの部屋まで来ることはできなかったからね。」

赤井は、鼻で笑った。

赤井「フン。無駄口叩いている暇があるなら、銃でも持ったらどうだ？」

そう言うと、バツと銃をパイカルへと向けた。

しかし、パイカルは銃を持たない。

一歩も動こうとしない。

さすがにおかしい。

パイカル「私は、君たちの敵になるつもりはないよ。」

皆「?!」

パイカルの驚くべき言動に、皆は目を見開いた。

つまり、これは・・・

‘裏切る’ということだ。

パイカル「組織のやり方は卑劣だ。そんなやり方には、もうついていけない。私を、気絶させるなり、殺すなりして、先に進みたまえ。」

パイカルは、じつと赤井たちを見つめた。

すると、蘭が動いた。

哀「蘭さん?!」

蘭は、自分の得意技、上段回し蹴りを、パイカルに食らわせた。

パイカル「フッ。これで・・・扉が開くはず・・・だ・・・」

スーッと、パイカルは意識を失った。

蘭「優作さん・・・ありがとうございます・・・」

ガガガガガ・・・

ゆっくりと、扉が開いた。

赤井「行くぞ。」

赤井は、一言だけ喋ると、スタスタと歩いていった。

皆も、パイカルを心配しながら、赤井についていった。

FILE 5 裏切り（後書き）

適当です。

優作さんなら、こんな感じかと。

すみません、本当に・・・

題も適当ですが、これしか思いつかなくて・・・

すみませんでした。

でも、感想等を書いてくださるとうれしいです！

お願いしまーすww

FILE 6 先に

次の部屋へと着いた。

ここには、四天王以外は、入ってはならないのか、下端でもない。

哀「ベルモット・・・」

そこには、ベルモットがタバコを吸って、立っていた。

ベルモット「ずいぶん早かったのね。やっぱり、パイカルは裏切ったようね。」

ジョディ「やっぱりってことは・・・予想はついていたってことね。」

ベルモット「ええ、もちろん。光で生きてきたパイカルは、闇では生きれない。闇で生きてきた人たちは、光では生きれない。これが、普通なんだもの・・・フフッ。」

タバコを捨て、銃を赤井たちに向けた。

ジョディ「下がってて。」

ジョディが、哀達を後ろへ下がらせた。

ベルモット「まあ、頑張らないと負けちゃうわね。」

そして、銃撃戦が始まった。

避けて、撃って、けがをして・・・

その繰り返しだった。

しかし、次の一瞬で勝負が決まった！

ジョディ「うっ！」

赤井「ジョディ！」

ベルモットの撃った弾が、ジョディの腹を貫通した。

ベルモットが、ジョディの頭に銃を当てた。

ベルモット「ウフフ・・・good-bye・・・Jody。（さようなら・・・ジョディ）」

バン！

銃声が轟いた。

哀「ジョディ・・・先生・・・」

ジョディが、死んでしまった。

その事実を、信じることができない皆。

赤井もそうだった。信じることができなかった。

だが、今はベルモットを倒すのが先。

そして、ベルモットに銃を向けた。

そして、また、銃撃戦が始まり・・・

ベルモット「うっ！」

ベルモットが崩れた。

赤井が、ベルモットの頭を撃ちぬいたのだ。

ガガガガガ・・・

扉が、ゆっくりと開いた。

悲しみに明け暮れている皆に、赤井は声をかける。

赤井「ジョディの分もやらなくてはならないことがあるんじゃないか？」

皆「！！」

赤井の言葉で、一瞬固まってしまふ哀達。

赤井「泣いてて、先に進めるのか？」

赤井はそう言うのと、先に行ってしまった。

和葉「・・・そうやな。泣いてて、ジヨディ先生が帰ってくるわけやない。先に進んで、ジヨディ先生の分も、戦わなあかん。私は、あの人と一緒に行くで。」

服部「俺もや！敵が工藤やとしても、なんとかして倒さなあかん！」

蘭「私も！」

哀「私もよ。」

園子「私も！何もできないけど、頑張るよ！」

小五郎「俺もだ！」

ジェームズ「よし。赤井君を追おう！」

皆「おう（ええ）！！」

哀達は、赤井を追って、扉をくぐり、走っていった・・・

FILE 6 先に（後書き）

もう、わけがわかりません・・・

ジョディを殺してしまつて、すみません。

本当は、赤井にしようかと思つてたんですが、やっぱり、ジンと戦つてほしかったので（笑）

ご感想等を、待つてまーすww

FILE7 相討ち

赤井達は、長い通路を歩いていた。

なぜ追いつけたのかというと、走っていたのが、まず一つ。

もう一つは、赤井が、途中で待っててくれたのだ。

そのおかげで、哀達は、赤井と合流した。

今赤井達が歩いている通路は、パイカルからベルモットへと続く通路よりも長い。

次が、四天王三人目だからだろうか。

長い長い通路を抜けた先には、ジンが立っていた。

ジン「フン。ベルモットも倒されたか・・・」

ジンはそう言った後、気がついた。

ジン「ジヨディ・スターリングがいない・・・ベルモットに殺^やれたか。」

赤井「ああ・・・そろそろやろうじゃないか・・・」

ジン「フッ。」

赤井とジンは、銃を向けあった。

哀達は、ただ見守ることしかできない。

そして、銃声がアジトに轟いた。

両者とも無傷。

弾と弾が、ぶつかり合ったのだ。

無言で、また銃を撃つ。

哀達は、喋ることさえできない。

何分たっても、決着がつかない。

これは、体力の問題になってくるだろう。

両者とも、息が切れている。

赤井「くっ・・・」

ジン「チッ・・・」

両者、一歩も譲らぬ戦い。

手を出すことができない哀達。

どうすればいいかと考えながら、見守る。

ジン「そろそろ決着をつけないとな・・・」

赤井「ああ・・・」

また、銃撃戦が始まった。

そして、次の瞬間、勝負が決まった！

ジン「ぐっ！」

赤井「うっ！」

両者とも、相手が撃った弾に当たり、膝を折った。

ハアハア息を切らしている。

ジェイムズ「赤井君！」

声を出さずにはいられない状況だ。

もしかしたら・・・もしかしたら、両者とも死ぬかもしれない。

それが、不安で不安で、たまらないのだ。

赤井「もう、終わりか・・・」

ジン「フンッ。決着はあの世でな・・・」

赤井とジンは、ゆっくりを前に倒れた・・・

哀「赤井さーーーーーん!!」

哀の声が、アジト中に響き渡った。

ガガガガガ・・・

哀の声を打ち消すように、最後の扉が開いた。

服部「・・・行くで。次は工藤や。最後なんや。俺らで、赤井さんや、ジョディ先生の分もやるんや。」

ジェームズ「行こう。最後なのだから。」

哀「もちろん！行くわよ、皆！」

皆「おおー！」

皆で一致団結し、扉をくぐった。

最後の敵、コナンの元を目指して・・・

FILE7 相討ち（後書き）

そろそろ終わりです、たぶん・・・

ここに、小話を書いていたはずですが、次の話を考えていると、何を書けばいいのやら、分からなくなってしまうして・・・

すみません、本当に・・・

ご感想等を待ってます。

FILE 8 仲間

コナン（以下スピリタス）のところまで着くには、だいぶ時間がかかりそうだった。

ベルモットの部屋から、ジンの部屋までの道のりとは、はるかに違う。

さすがに長すぎる。

和葉「もしかして・・・道、まちごうとるんとちゃう・・・？」

服部「アホ！ここまで一直線やったやないか！ほかに道あったんか？」

確かにそうだ。

ジンの部屋から、今哀達のいるところまでは、一直線だった。

戻れば、ジンの部屋。

しかし、先に行けば何があるか分からない。

ひたすら前に進むことしかできないのだ。

ジェイムズ「とりあえず、先に進もう。」

蘭「そうよ。次は新一。あの人たちがいなくても、頑張らなくちゃいけないわ。行きましょう。」

服部「そつやな！行くで！」

皆「おおー！」

また、ゆっくりと歩き始めた。

そして、やっとスピリタスの部屋に着いた。

園子「長かったわね、ここまでの道のり・・・」

哀「ええ。ここで最後よ・・・」

皆の調子が整った所を見計らって、ジェームズが、バンツと扉を開けた。

そこには、不敵な笑みを浮かべている、スピリタスが立っていた。

ジェームズ「cool guy・・・いや、スピリタス・・・」

スピリタス「よう。遅かったじゃねえか。まあ、予想していたよりは、早く来たけどな。」

不敵な笑みで、スピリタスは一步前にでる。

すると、哀が、ゆっくりと口を開いた。

哀「私は、あなたを味方だと思っていた・・・心強い‘仲間’としてね・・・でも、あなたが敵だなんて・・・未だに信じられないわ。」

スピリタス「・・・‘仲間’か・・・」

フツと哀しげに笑うスピリタス。

スピリタス「‘仲間’とは何だ？」

哀「え？」

スピリタス「‘仲間’とは何なんだ？ただ、言葉だけそろえていれば、それで‘仲間’なのか？」

蘭「違うわ！」

蘭が、反論した。

蘭「‘仲間’って言うのは、助けあうものよ！騙されていたとしても、哀ちゃんは、あなたに助けられた。それだから哀ちゃんは、心強い‘仲間’として、あなたを見たのよ！・・・あなたに、裏切ら

れた人の気持ち分かる?!新一!!」

スピリタス「!!その名で呼ぶな!もう、呼ぶな・・・」

耳をふさいで、必死に蘭の言葉を聞くまいとするスピリタス。

蘭「分かるの?!あなたに!!裏切られて、どれほど苦しいか!裏切られる気持ちを知らないから、あなたはそんなことが言えるし、仲間」の意味を知らないのよ!!」

スピリタスは、カッと目を見開いた。

スピリタス「俺だって裏切られたことぐらいあるよ!!」

皆「!!」

スピリタスから、思いもしない言葉が出てきて、皆は驚く。

スピリタス「いいよ、教えてやるよ。俺が組織を作った理由をよ・・・」

あれは、10年前のことだ・・・

FILE 8 仲間（後書き）

ああ、疲れた・・・

次も、大体決まっていますが、長引く恐れあります。

でも、頑張りますので、読んでくださいねw

ご感想等を待ってます。

FILE 9 過去

あれは、俺がまだ7才の頃の話だ・・・

俺は友達と一緒に、学校の運動場で遊んでいた。

ちょっと大人っぽいと言われていたから、頑張って子供っぽくして。

俺は、あまり友達を作るタイプじゃなかったが、なぜかとても嬉しかった。

その夜、俺は教室に忘れ物をして、学校に戻った。

その時、話声とともに、笑い声も聞こえてきた。

何かと思って耳をすませた。

でも、聞いた後で、聞かなきゃよかったと後悔した・・・

友達A『なあゝ。俺もう嫌だよ。工藤菌が移っちまうじゃん!』

友達B『もう少し。もう少し仲良くなれって。そして、バツ！って裏切れば、あいつも傷つくだろう？』

友達C『俺も！俺もやるから、もう少しやれよ。なっ？』

友達D『でもさあ、ホント笑えるよな。あいつの言葉遣いとか、態度とか。自分じゃ普通なんだろうけど、周りから見たらなあゝ。』

友達E『本当よね！あたしも聞いているとき、吐きそうになったわ。クツ・・・思い出すと、笑いが止まんないわ・・・』

友達D『クツ・・・アハハハハハ！もう限界！』

友達A、B、C、『アハハハハハ！！！！』

それを聞いて、悔しかった。

お前達が大人っぽいつて言うから、頑張ってるのに。

それを、陰で笑っていただなんて。

もともと、俺は陰でいじめられてたんだ。

そう実感した。

うわぐつがたまに、無くなるけど。

全部、友達が見つけてくれた。

友達A『これ、工藤のдар？落ちてたぜ？』

全部、自作自演だったんだ。

隠して、そして、‘ないない’と騒いでいる俺に渡して。

そして、信頼させておいて、裏切るつもりだったんだ。

裏切るつもりで――――！！！！

もう、自分でもわけが分からなかった。

パンツと扉を開けた。

あいつらは、俺が今来たばかりだと思ったんだろうな。

友達E『あつ！工藤君！どうしたの？忘れ物？』

友達D『俺たちもなんだ。一緒に帰ろうぜ！』

こんなやつらと一緒にいたら、いつ、何をされるか分からない。

いつもなら。

コナン（ここでは、コナンと表示）『うん！一緒に帰ろっ！』

そう言っただと思う。でも、真実を知ったからには、もうやってられない。

コナン『さっきの話、全部聞かせてもらったぜ？いじめっ子さん・・・！』

殺気立たせて言うと、あいつらは後ずさりしやがった。

友達B『な、何のことだよ、工藤・・・』

コナン『とぼけるな！！オメーらと一緒にいたら、何をされるか分からねえ。二度と話し掛けんじゃねえよ！！』

そうだ。これでよかったんだ。

もう二度と、この学校には行かない。

俺は親に話した。

親は、承知してくれて、帝丹小学校に行ったんだ。

でも、やっぱり怖かった。

裏切られたくなくて。

その時、親がこの組織の、あの方、だと知った。

俺は、居場所がないならどうせ、と思って、組織に入った。

すると俺は、見る見るうちに腕を磨いて、‘あの方’になったんだ。

父さんも、許してくれたよ。

この組織にある規則のようなものは、たったの2つだけ。

『裏切り者には‘死’あるのみ。』

『‘あの方’の命令には背かない。』

ただこれだけだった。

それ以外は、何もない。

そして俺は、7才という年で、組織の‘あの方’になったんだ・・・

FILE 9 過去（後書き）

題名、適當すぎますよね・・・

これ以外、思い浮かばなくて。

他にも、『哀しき過去』って題名もいいかと思いましたけど、やっぱり、上のと比べると、長いような気がするので・・・

この題名にしました♪

ご感想等をお願いしますww

FILE 10 認めて

スピリタス「どうだ？これを聞いてもまだ、裏切られた気持ちを知らないと言えるか？」

皆「・・・」

皆は、黙りこむことしかできなかった。

スピリタスに、こんな過去があっただなんて、知らなかったから。

スピリタス「そろそろ話は終わりだ。殺^やるぜ。」

カチャツと銃を向ける。

哀が、声を上げる。

哀「人を殺して、何がいいの？！私も人のことは言えないけど、あなたって、本当に最低！！味方だと思って、信じてたのに・・・最低よ！！仲間が死んでも、平気でいるんだものね！！」

哀の頬に、涙が伝った。

哀「お姉ちゃんを返してよ・・・あなたのせいで、お姉ちゃんは死んだのよ！どうしてくれるの？！たった一つの命を！！！」

スピリタス「・・・死んでしまったからでは遅いだろ？いちいち言うんじゃないよ。」

スピリタスが反論する。

すると、蘭がゆっくりと口を開いた。

蘭「・・・あなたは、自分が強いと思ってる？」

スピリタス「え・・・？」

蘭「新・・・いえ、スピリタスは、人を殺して権力を握って、強いと思ってるの？」

スピリタス「・・・」

今度は、スピリタスが黙る番になってしまった。

蘭「そんなの、強さって言わないよね？いつも言ってたじゃない。そんなの強さじゃないって。どうして？過去にそんなことがあつて、悔しかった気持ちは分かるよ？悲しかった気持ちだつて分かるよ？でも、人を殺してもいい理由になんてならな・・・」

スピリタス「黙れ！！」

スピリタスが声を上げた。

スピリタス「お前たちに何が分かる！同情だなんて、いらない！俺はただ・・・自分の力を認めてもらいたかったんだ！！」

皆「！！」

スピリタスは、哀達が何かを言う前に、言葉をつづけた。

スピリタス「皆、子供としてしか見てくれなくて・・・ただのマセガキとしか見てくれなかった・・・だから力を認めてもらえば・・・ちゃんと俺を見てくれると思ったんだ！！でも、皆見向きもしない・・・それに、たった一回だけ事件を解いただけで、すぐに名探偵呼ばわり・・・俺、正直もう疲れたよ・・・」

ジェイムズ「スピリタス・・・」

スピリタス「俺の力を・・・認めてくれる人がほしかった・・・俺の組織の皆は、俺をちゃんと見てくれた。見た目が子供なのに、ちゃんと‘ボス’とか、‘あの方’だって言うてくれた。敬語だって使ってくれた。それが言葉だけだとしても・・・今この時だけ、心が軽くなる時だった・・・」

哀「・・・あつ・・・？」

哀が、小さな声を漏らした。

スピリタスの頬に、光る水滴が流れたから。

園子「涙・・・？」

そう、スピリタスの涙だった・・・

スピリタス「そんな皆を殺されて・・・平気だなんて、いけない・・・シェリー、お前の言葉を返すよ・・・仲間を返せ！！俺の居場所には、ここしかなかった・・・どうしてくれるんだ！！」

スピリタスが、泣きながら言う。

その言葉は、スピリタスの心の叫びにも聞こえた。

居場所がもうない。

その思いが、スピリタスの心を支配した。

??「その言葉を・・・お前は使えるのか・・・?」

スピリタス「だ、誰だ?!」

男の声が、部屋に響いた。

その男とは驚きの人物だった・・・

ジェイムズ「あ、赤井君!!」

そう、赤井だったのだ!

赤井「君が、その言葉を使えるのか・・・？」

スピリタス「黙れ！この死にぞこないが！！」

スピリタスが、持っていた銃に力を込める。

赤井「ジンは・・・生きてるぞ・・・」

スピリタス「！！！！ほ、本当か？！」

驚きの言葉に、スピリタスは目を見開いた。

赤井「ああ・・・今さっき、目を覚ましたさ・・・」

スピリタス「・・・ジんが・・・生きてる・・・！！」

パアッとスピリタスの顔が明るくなった。

希望を見つけたかのように。

スピリタス「よかった・・・よかった・・・！」

ストーンとスピリタスの体が、静かに崩れた。

泣きながら、よかった、よかった、と言っていた。

スピリタスにも、まだ慈悲の心が残っていたということだ。

赤井は、静かにスピリタスに近づいた。

赤井「スピリタス。いや、ボウヤ。」

スピリタス「!!」

赤井は、静かに言葉を続ける。

赤井「ジンは逃がしたよ。君が来るのを待ってる。君と一緒に、また人生をやり直したいんだそうだ。」

スピリタス「俺と・・・？」

赤井「ああ。ジンも罪を償うと言っている。どうだ？」

スピリタス「俺は・・・俺は・・・」

スピリタスは、悩みに悩んで、答えを出した・・・

これから先は、次回のお楽しみ・・・

FILE10 認めて（後書き）

題名、‘・・・’を入れようと思ったのですが、やっぱりやめることにしました。

入れてるところがないものですから。

ご感想等を待ってます。

FILE 11 罪滅ぼし

スピリタス「俺は・・・」

スピリタスは、必死に考えていた。

赤井は、少し難しかっただろうと思ったのか、質問を少し変えた。

赤井「じゃあ・・・罪を償う気は？」

スピリタス「・・・あ・・・る・・・」

小さな声で答えた。

赤井「なら・・・ジンの元へ・・・行けば・・・いい・・・」

バターンッ！

そう言った瞬間、派手な音を立てて、赤井の体が前に倒れた。

スピリタス「あ、赤井さん・・・？」

今、この瞬間。

スピリタスが、コナンへとチェンジした。

コナン「赤井さん！！！」

すぐさま、生死を確認する。

どうやら、気を失っただけのようだ。

コナン「無理・・・させちまったな・・・」

ユラリと、コナンの体が揺れた。

そして、哀に話しかけた。

コナン「シェリー・・・」

哀「……！」

哀は、すぐに身構える。

コナン「解毒剤は、お前が監禁されていた地下室にある。持って行け。」

哀「え……？」

哀は、コナンの言葉の意味を、すぐに把握することができなかった。

1分ほどした後、意味を把握した哀は、コナンに言う。

哀「あなたは？あなたはどつするのよ？解毒剤、飲むんでしょ？」

コナン「……」

哀の質問に、コナンはすぐに答えることができなかった。

しばらくした後、コナンがゆっくりと口を開いた。

コナン「俺は・・・罪滅ぼしとして、この姿で生きるよ・・・」

哀「な、何ですって?!じゃあ、蘭さんは?蘭さんはどうなるのよ?!ずっと待ってたのよ?!飲んであげなさいよ!」

哀は、怒鳴ってしまった。

コナンの瞳は、大きく揺れた。

コナン「俺は・・・犯罪者だ。もう、俺は高校生探偵の『工藤新一』じゃない。罪人、『江戸川コナン』さ。いや、『スピリタス』のほうがいいな。」

フツと哀しげに笑う。

コナン「じゃあな・・・みんな。」

別れの言葉を告げ、コナンは去っていった。

誰一人、コナンを止めることがしなかった。

いや、できなかった・・・

もし無理矢理、元の場所に戻したとしても、コナンは心を閉ざし、いつものコナンではなくなってしまうだろう。

そうなるくらいなら、いつそのこと、コナンの思い通りにしてあげたほうが、コナンのためだと思ったのだ。

蘭「新一・・・」

園子「蘭？」

蘭「新一・・・新一・・・・・・・・！！！！」

蘭は、この現実には耐えられなくなり、泣きだしてしまった。

今まで、ずっと待っていた人が、もう戻ってこないと分かったから。

その心の傷は、癒すことはできない。

コナンが「新」^がとして、戻ってこない限り・・・

FILE11 罪滅ぼし（後書き）

題名、おかしいと思いますが、気にしないでください。

ご感想等を待ってますw

最終話 お帰り

‘あの事件’から、早1年が経った。

‘あの男’は、いつになっても帰ってこない。

毎日毎日、‘あの男’が帰ってくるのを待っている。

蘭も、小五郎も、園子も、哀も、服部も、和葉も、歩美も、元太も、
光彦も、赤井も、ジエームズも。

皆、帰ってくるのを待っていた。

まだか、まだか・・・

1年経って、もう帰ってこないと諦めかけたその時・・・

ガチャッ。

不意に、扉が開いた。

目の前には、帽子をかぶり、黒のロングコートを着た、高校生ぐらいの男と、同じ恰好の、長髪で銀髪の男がいた。

顔が見えなかったのに、皆は、すぐに誰か分かった。

だが、嬉しさのあまり、喜びの声しか出なかった。

蘭「新一・・・新一ー！！よかった、生きてて・・・ずっと待ってたんだよ？どうしてすぐに顔を見せてくれなかったのよ！」

それを聞き、ゆっくりと帽子をとる。

そして、薄っすらと笑った。

新一「すまねえ・・・どうしても、行くに行けなくてさ・・・」

肩を震わせて、泣く蘭を見ながら、謝る。

ジンは、謝る新一を、スッと見て、言った。

ジン「そろそろ俺は行くぜ。じゃあな、スピリ・・・いや、工藤新一。」

フツと笑い、静かに階段を降りていった。

新一「今までありがとうな！ジン！！」

窓から、ジンに向かって叫んで、手を振る新一。

それに答えるように、手を振って、車へと乗り込むジン。

ジンのその時の表情は、とても柔らかかった。

泣きやんだ蘭が、じっと新一を見る。

そして・・・

蘭「お帰り・・・新一！」

ツツと、新一の頬に涙が伝う。

新一「ただいま・・・蘭・・・そして、みんな・・・」

そして新一は、哀達のところへと戻ってきた。

今、ここから。

哀達と新一の、新たな物語が始まる。

今から描かれる、この物語。

きっと、楽しいものになるだろう。

そう願いたい・・・

E
N
D

最終話 お帰り（後書き）

終わりました・・・

長い間みていただき、ありがとうございました！

最後の、ご感想、待ってますww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1423f/>

黒の組織との最終決戦！！

2010年10月28日03時35分発行